

なぜ文化人類学？ なぜ共生？

稲村哲也

文化人類学と考古学（この2つはよく混同される）は、高校まで教科としてないため、一般にはなじみが薄く、なにか特殊な研究のように思われることも少なくない。

（ちょっと皮肉を込めて）「浮き世離れた、楽しい学問をしてますね」とか、「好きじゃなきゃ出来ない研究ですね。ミイラを捜しに行くんですよね」とか言われることもある。そうした誤解は地道な研究を発信することで、解いていかなければならないが、「どうして文化人類学の道を選んだのですか」と言う質問もよく受ける。

多文化共生研究所は、異なる分野の専門家に参加していただき、「共生」について共に実践し、考えていくことを目的として設立された。本誌「共生の文化研究」の目的のひとつも、異分野の研究者同士の相互理解である。相互理解の第一歩として、「研究者となったきっかけや生の体験」を語り、研究をわかり易く紹介しあうため、研究エッセイ、フィールドノート、それにプロフィール欄を設けた。そして私も書き始めた。

ところが、お忙しい中、呼びかけに応じて書いてくださった同僚諸氏の原稿は、私が期待した以上のものだった。それと共に、私自身、多文化共生研究所を立ち上げ、所長の任に就き、本誌を刊行するという段になって、責任を少しは自覚するようになった。ふだんの生活スタイルよろしく「いろんな分野の人が集って、お酒でも飲みなが

ら議論して、楽しく研究しましょう」（その方針はくずすつもりはないが）、だけでは済まされない気がしてきたというわけである。

松宮さんのエッセイの中にある、学生からの問いかけ「なんで『多文化共生』を考えるんですか？」、そして「多文化共生をあっけらかんと明るい口調で語ることへの抵抗」は、私への問いかけでもあると受け取った。現場でソーシャルワーカーとして現実と格闘してきた長谷川さんのエッセイの「こども・若ものの生きずらさ」論には強い説得力があり、共感した。天草出身の『共生』に憧れるペシミスティックな宗教学者の谷口さんの研究のバックグラウンドもたいへん面白かった。「情（なさけ）に報（むくいる）ために情報科学を研究する」（県立3大学研究交流会で）という奥田さんの理系の立場からの「共生」への思いは頼もしく感じられた。そして、加藤さんの人生の思索遍歴と「わたくし心の公（おおやけ化）」は大変刺激的だった。

そこで、私自身も、「わたくし心を公（おおやけ）化」しながら、文化人類学研究のバックグラウンドや「共生」への思いを、率直に語らなければならないと感じた。結果、このエッセイの中味が途中から変わってしまった。つい熱が入り、筆が滑って冗長に過ぎてしまったが、どうかお許しいただきたい。

船乗りにあこがれたが

私の故郷は静岡県東部の駿東郡長泉町（小学校に入ったころはまだ村）という田舎だが、子どものころ、近所に船員のおにいちゃんが住んでいて、よく船や外国の話聞いていた。なぜか、「てっちゃん、通信士になるといいぞ」とよくアドバイスされていた。中学生のころ、北杜夫の『どくどくマンボウ航海記』を読んで、さらに船乗りにあこがれるようになった。船長を辞めた後は横浜の「港の見える丘」に住んで、外国船を誘導するパイロット（水先案内人）になる、となぜか老後のビジョンまでもっていた。

沼津東高校に入ってから、志望校をずっと「東京商船大学」と書いていた。体力をつける必要があると思い、（最近にわかに注目されている）ハンドボールの部活をずっと続けた。高校1年のとき父が事故で亡くなったので、「防衛大学に行って、海上自衛隊に入ろうかな」と大学生の兄に言ったら、「そんなこと考えなくていいよ」と言われた。3年のとき先生に説得されて志望を変え、結局、東京大学理科Ⅱ類に入学した。なんとなく水産学科進学を志望していた。そして大学でヨット部に入った。

大学紛争の洗礼

1968年の入学式は安田講堂で行われたが、「入学式粉碎」を叫ぶ学生活動が講堂のドアをガンガンと叩いていたような記憶がある。駒場の教養学部のキャンパスも、中国簡体漢字をつかったスローガンのタテ看が溢れていた。教室に行くと、ヘルメットに

ゲバ棒の活動家が入ってきて教官を追い出し、アジテーションをして授業が終わる、ということが多くなった。「打倒帝国主義」「東大解体」だの、「マルクス」「レーニン」「毛沢東」「資本主義」「共産主義」「革命」というような言葉ばかりが飛び交っていた。田舎の高校からポッと出の体育会系の純情な新生にとっては、面食らうことが多かったが、「大学ってすごいなあ」と思った。デモには参加したが、野次馬の域を出なかった。7月に入ると、東大全共闘（全学共闘会議）が結成され、教養学部がストライキに入り、正門にバリケードが築かれて、授業は全くなくなった。当時の駒場キャンパスで行われた三島由紀夫の講演はよく覚えている。しかし、大学紛争には一種の違和感を覚え、ヨット部の合宿だけ続けた。

船で太平洋を渡る

その年の秋、朝日新聞が募集していた「朝日洋上大学」が目にとまって、応募した。学生が1年間新聞配達をしてバイト料を積み立てれば、船でハワイ、アメリカ西海岸に連れていってくれる、というものだった。ヨット部を休部して、新聞屋に住み込んだ。朝寝坊の私には本当につらい毎日だったが、（二次募集だったのですでに3ヶ月が過ぎており）、9ヶ月間、朝刊と夕刊を配った。翌年夏、1万トンの客船に乗って太平洋を渡り、念願のハワイ、西海岸へ。

初めての海外での最大のカルチャー・ショックは、カリフォルニア大学バークレー校の寄宿舎に泊まったときのこと。当時のバークレー校はヒッピーの最大の拠点だっ

た。学生たちは、反体制の意志表示として、みな長髪で裸足で歩く学生も多かった。白いゆったりしたワンピースに光物をジャラジャラ身につけたインディアン風の女子学生も多かった。ロック演奏、ブラック・パワー（黒人解放運動）、レッド・パワー（先住民解放運動）、ベトナム反戦などのパフォーマンスが、広いキャンパスのあちこちで行われ、お祭りのようだった。大学生が何と個性的で多様なことか。ヘルメットにタオルの覆面でゲバ棒の「制服」で集団行動をとる日本の大学紛争とは、何と違うことか……。

港湾労働者のアルバイト

帰国後、3ヶ月分の積み立てが残っていたので、友人と横浜で「たちんぼ」（日雇い労務者）をしてお金を稼ぐことにした。朝トヤ街の黄金町に行くと「手配師」（斡旋人）が車でやってきて、必要な人数を集めて連れて行く。横浜港の船の掃除、荷上作業などが多かった。大型貨物船の船内や船倉などが見られて面白かった。

しかし、行ってみなければ仕事の内容は分からない。あるとき、大型タンカーに連れていかれ、防毒マスクをわたされたときには面食らった。ただ一人、タンカーのスクリュー軸のある船底まで非常階段で下りていき、内壁にペンキを塗った。シンナーが沈殿しており、時折ガーッとスクリューの回る音がして、身の危険を感じた。

日雇い労働者の人たちは、昼になると博打を始め、「一に色事、二に日当、三にサボサボ、四に仕事」とか言っていた。そういう人がけっこう多い中で、私たちは「まじ

めに」仕事をしたので、馴染みの手配師に気に入られて、楽な仕事を回してくれることもあった。松竹の撮影現場のセットを作る仕事をやったときには、「駅のホームの便所の壁板にクギを2、3本打つときゃいいよ」と言われ、さぼって撮影所を探検したら「フーテンの寅さん」が撮影をしていた。

この港湾労働などのバイトのおかげで、日本の底辺で生きる人たちの生活を少しは知ることができた。

「降年」？

東大紛争は、69年入試中止の事態に発展するが、69年1月の安田講堂攻防戦のあと終息に向かった。一年ぶりに学生がキャンパスに戻ると、学期が短縮されてどんどん進級し、ほとんどの学生は4年で卒業していった。私は理系にすっかり興味を失ってしまい（勉強の習慣も失い）、試験を受けなかったので、「降年」となった。2年生まで自動的に上がったが、入試中止で下の学年がなかったため「留年」ができず、(2学年下の)70年入学の新一年生と一緒に「降年」となったわけだ。このころ、文化人類学に関心をもちはじめ、新しい目標に向かって勉強し、教養学科文化人類学分科への進学が叶った。

早くから知識人の自覚をもって「思想」と格闘されておられた、加藤史朗さんの「麻布高校」時代（本誌研究エッセイ）と対比すると、私が過ごした高校は、いかにも政治性の全くない「こどもの世界」に安住した田舎の公立進学校といった感じがする。そこから東京に出て、一気に様々な社会的現実や多様な価値観に直面して、大学生生活

の最初の1年間は、人が生きることの意味や自分自身の生きる道を模索して、もがいていた時期でもあった。当時の時代背景にも影響されたのかも知れないが、一時期かなり「ニヒリズム」に傾倒した。世の中に存在するあまりにも大きな不平等、不条理、不幸、不慮の死などを前にしたとき、絶対的な価値など見出せないし、死によって無に帰す人間の生に意味を見いだすことができなかつた。当時の学生運動にも、イデオロギーに基づいた行動というより、生き方に確信がもてない学生たちの逃避的行動の側面がかなりあるように感じていた(実際、大学紛争が終結すると、「活動家」の多くはさっさと卒業して企業や省庁に就職してしまつた)。

いろいろな本を読んでみたが、自分の中にストーンと入って納得できたのは、「人生はキャンバスに描いた絵のようなものだ。キャンバス自体には何の価値もない。あるのは描かれた絵画の芸術的な価値だ。生きることが芸術である。たとえ不遇な人生で終わったとしても、どの人生にも本人にしかわからない芸術的価値がある。少数の人がそれを理解してくれるだろう」というような意味の、たしか、サマーセット・モームの言葉だった。私なりに、「芸術としての」人生という考え方に共感し、「生きることの意味はないかも知れないが、生きるとは面白い」と確信した。それが、文化人類学への関心とつながつたような気がする。

文化人類学へ進学

専門課程で教養学科文化人類学分科へ進学した。文化人類学の教室はほんとうに楽

しかつた。塾で生活費を稼ぎ、授業に出たあと、仲間と渋谷あたりでよく飲み歩いた。

ちょうど、イギリス留学とアフリカでのフィールドワークから帰ってきたばかりの新進気鋭の長島信弘先生(一橋大学名誉教授、現在中部大学教授)が非常勤で教鞭をとっておられたが、級友の清水展(京都大学教授)と結城史隆(白鷗大学教授)と私は、とくに可愛がってもらつた。ギャングルとお酒が大好きな長島先生からのお誘いを断つたことがないからだ(先生の多くの研究業績の中に『競馬の人類学』というのがある)。授業の後、しばしば雀荘や飲み屋が教室の延長になつた。麻雀の牌に重ね合わせて人生を語り合い、飲むほどに、ウガンダでのテソ族のフィールドワークの体験などを語ってくれた。バーで「先生」って呼ぶと、「こんなところで先生って呼ぶもんじゃない。先輩とか社長とか言え」と言われた。

先生の体験談の一コマ。「あるとき、村一番の美人をバイクに乗せて首都カンパラまで連れてつた。ところが村にもどつてみると、おおごとになっていた。結婚話も出たが、(先生は)バイクとかカメラは持っていたけど、牛を持っていなかったから、彼女の一族に婚資が払えなくて結婚できなかった」。

雀荘と飲み屋で長島信弘先生から学んだ人類学は楽しかつた。「人類学が人生そのもの」という生き方をしてきた先生の語りには迫力があつた。私たちは、「人生は面白い、人類学は楽しい、だから命を賭けても怖くない」というような生き方を、先生から学んだ。

ヨットの遭難さわぎ

大学のヨット部に復帰して間もなく、ヨット部が所有していたクルーザー（外洋ヨット）の艇長になった。ヨット・レースの時の審判艇を務めたり、伊豆七島や伊豆半島を帆走して、海の生活を楽しんでた。当時は日焼けして真っ黒だったので、三浦半島の漁港で、「あんちゃん、マグロ船にのらねえか」とスカウトされたこともある（ちょっと心が動いたけれど、断った）。

あるとき、後輩の2人のクルーと八丈島まで行く計画を立てた。大島の漁港で一泊して南下したが、三宅島を通過したあたりの黒潮の強いところで、春一番の大シケに遭ってしまった。ヨットは、船底に細長く伸びた鉄のキール（竜骨）が錘になっていて、ふつうは横転することはないが、マストを超える高波と暴風による巻き波で横転してしまった。

体が海に放り出され、その上を波がザーッと通りぬけたが、幸い片手で握っていたラダー（舵）を放さなかった。2人のクルーはキャビンの中に居たので、これも幸いだった（もし放り出されていたら……と思うと、ぞっとする）。しかし、1人は額と顎に裂傷を負ってしまった。しかも、デッキから流されたロープがスクリューに絡まってしまった。ストーム用セールを張りエンジンもかけて機帆走をしていたからだ。

しばらくは漂流するしかなかったが、気を取りなおし、命綱をつけて船尾に潜ってナイフでロープを切った。ヨットはなんとか体勢を取りなおしたが、体が冷え切って震えがとまらなくなった。キャビンのベッドにもぐりこんだが、体が激しく震え、母

やいろいろな人の顔が、フラッシュバックのように次々と浮かんだ。「死ぬかも知れない、まだ死にたくない」と思った最初の経験だった。

1時間ほどたってからか、体が動くようになってくれたので、伊豆大島の方向に舵を取った。途中、中型漁船に出会ったので、発煙遭難信号を出した。漁船が気づいて接近してくれたので、錘のついたロープを投げ、接舷して負傷したクルーを救助してもらった。夜の間、大島に向けてすこしずつ近づくにつれて、天候は回復してきた。暁の明星が輝き、ついで太陽が昇った。太陽に「ありがとう」と叫んだ。

大島の港に入って連絡をとると、大学に遭難対策本部が置かれているとのことだった。漁船に救助してもらったクルーがかなり興奮して、「もうだめです」と連絡を取ったそうで、新聞にもヨット遭難の記事が載ってしまった。

メキシコ留学

3年次に進級したとき、日本メキシコ交換留学制度を知り、スペイン語の集中講義を受けて、1973年に留学した。留学先は先住民が多く暮らす南部オアハカ州にあるオアハカ大学である。オアハカ大学は医学と法学の大学だったため、カリキュラムに適切な科目がなかった。大学に着いて学長に面会したとき、正直に「取りたい授業がない」と言って、若い学長さんを大いに憤慨させてしまった。スペイン語が未熟だったせいもあるが、やはり外交辞令というか、受け入れ大学への配慮が必要だったと、後で反省した。

結局、インディヘナ研究所の若い女性研究者が特別授業を開講してくれたが、メキシコ人と一緒に授業を受けてみたかったので、高校の授業にも出席させてもらった。

ところで、ラテンアメリカは、モンゴロイド系先住民とヨーロッパ系、その混血であるメスティーソ、それにアフリカ系とその混血も含め、世界の縮図ともいえる多様な人種構成をもっている。メキシコの場合はメスティーソが多数を占めており、国民性としては、陽気で情熱的だとよく言われる。高校でも当然メスティーソが多いが、顔つきも多様、服装も多様で、それぞれが個性的だ。女生徒が化粧をするのはごく普通のことで、それがむしろ自然な感じがした。制服着用だけでなく、靴下やスカートの長さまで規制して画一性を求める日本とは対極的である。日系ブラジル人の子弟が日本の学校に入れられて、「窮屈で仕方がない」というのも無理はないと思う。

先住民社会のフィールドワークの試み

オアハカ市がせっかく先住民の居住地に囲まれているのだからと、授業は半年ほどで切り上げ、フィールドワークを試みた。地図の上で調査地を山奥のサポテコ族のサン・フアンという村に決め、定期的に村に荷物を運ぶトラックの荷台に乗って現地に入った。村に着き、役人（村長秘書）に会って「日本の学生だが地域の伝統文化を学びに来ました。しばらく生活させて欲しい」と言うと、広場の小さな電信局の建物の一部屋を提供してくれて、苳を2枚くれた。一晩そこで眠ると、翌朝は下着の縫い目にそってびっしりと虱の跡がついていた。

数日後、休暇から戻った学校の先生が私のことを聞きつけ、会いに来てくれた。自らもよそ者で、先住民の教育に携わっている先生は、私の意図をすぐ理解し、「家に一緒に住みなよ」と言ってくれた。そのヘスス・アルカンタラ先生は、奥さんと共に、授業の傍ら、政府やNPOの援助を使って村人のために活動したり、村の若者を集めてバスケットボールのチームを作っていた。私も、中学でバスケットをやっていたので、チームのメンバーとなって、近村の祭りで開催されるバスケット大会などに参加するようになった。顔つきはあまり変わらないので、他村では、私を外国人と思う人はほとんど居なかった。

村人と親しくなっていて、結局、出たり入ったりしながら1年近く滞在した。村の寄り合いや祭りや行事に参加し、先住民のコミュニティがどのように運営されているのかが、実感としてわかるようになった。ただし、文化人類学の調査としては完全に失敗だった。村人との距離が近くなりすぎて、質問をしたり、ノートを取ったりする気がしなくなってしまったからだ。

そこで、メキシコのビザが切れたのを契機として、グアテマラに行き、各地を旅行したあと、高地マヤ系キチェ族先住民のスニルという村で改めてフィールドワークを行った。グアテマラは先住民が過半数を占めるので、メキシコと比べると伝統文化がよく残っていた。また、メキシコでは、先住民が貧しく周縁的な地位に追込まれているのに対し、グアテマラでは堂々と生活しているように感じた（ただし、グアテマラでは、その後の長期にわたって先住民虐殺や内戦状態が続き、1995年によく「先

住民族の権利とアイデンティティー憲章」が成立した)。

グアテマラでは、土着信仰と融合したカトリック信仰、その信徒組織と祭、サン・シモン信仰 [ラディーノ (混血) の風貌をした聖人像 (人形) を生きた人のように扱って信仰の対象とする] などを卒論にまとめ、なんとか刊行論文をひとつ書いた。

このメキシコ留学とフィールドワーク (半分くらいは放浪) の体験で、異文化社会を知り、理解することの面白さを実感し、研究の道に進むことを確信した (高校までは数学や物理は好きだったけれど、暗記科目の社会科は大嫌いだったので、まさか将来自分が社会科学系の研究者になろうとは想像もしなかったが)。

ペルー現地調査

メキシコ留学から2年後の1975年春に帰国して、文化人類学の教室に復帰した。結局、大学卒業までに8年間かかった。メキシコ留学で1年間休学し、後の一年間は休学延長の手続きを頼んだ友人が忘れてしまって「留年」となっていた。結局8年間に、「降年」「休学」「留年」「留学」と、すべて経験してしまった。「降年」は、1968年入学の文系進学者のみが対象 (理系は、産業界の要請により、留年組の特別クラスを作って、1973年の卒業生を出した) の「超レア」ものであり、(自慢するようなことではないが) この4つの経験をした者はもしかしたら日本中で私だけかもしれない、と密かに思っている。

一緒に飲み歩いた劣等生仲間がすでに大学院に進学していたので、私でも大学院に

入れるだろうと思って、大学院に進んだ。修士課程では国外に出るのはひかえて、文献をよく読んだ。

博士課程に進学した年の夏休み、静岡県の実家に居ると、指導教授の増田義郎 (昭三) 先生から「熱海に居るんだけど、今から来ないかね」と電話があった。増田先生は熱海の湾が一望できる瀟洒な岩波書店の別荘で大航海時代叢書の年代記「インカ帝国史」(シエサ) の翻訳中だった。ビールをいただいた後、「実はペルーに民族学調査団を出すことになってね。君も行かないか。調査は半年くらいだが、君は2年くらい滞在したらどうですか。」言われた。

その2ヶ月後の9月には、ペルーの地を踏んでいた。ペルーでは、まずリマ市のカトリカ大学でケチュア語のコースを受け、それから大貫良夫先生 (当時東京大学)、友枝啓泰先生 (当時国立民族学博物館) のお供をして、アンデス各地を走り回る機会を得た。それからアンデス東斜面の農村で山本紀夫先生 (当時国立民族学博物館) のフィールドワークを手伝った。また、天野博物館 (リマにある私設の考古学博物館) 創立者の天野芳太郎氏の孫の阪根博さんと共に、増田義郎先生の運転手としてペルーの海岸地方をくまなく踏査した。実のところ、博士課程ではグアテマラで調査をやる予定でいたため、ペルーについての知識はほとんどなかったが、こうして約半年の間、アンデス研究第一線の先学から現地で教えを受ける貴重な機会を得た。

アンデス周遊の間に、たびたびリャマのキャラバンに出会った。標高4000メートル余でなだらかに起伏しながら広がる高原で、どこからともなく現れ、起伏の向こうに去

っていくリヤマたちのシルエットが実に美しく見えた。彼らは一体どこで、どのように生活しているのか。彼らの社会はどのように成り立っているのか。そうした疑問に答える文献を探しても、満足なものはない。そこで、翌1979年9月から1年余りの期間をかけて、ペルー南部のアレキパ県の高原でアンデスの牧民（ケチュア族）の社会の調査をやることになった。約2万円で2頭の馬を手に入れ、現地の少年を助手にして、広い高原を歩きまわった。

標高約4500mでの調査は、極限的な自然環境であり、しばしば体力の限界を感じるものであった。インカを征服して植民地支配をしたスペイン系の人々も、高地は苦手だった。それだけに、インカの伝統を受け継ぐ慣習が色濃く残っているおり、学術的にも未発見のことばかりだった（研究内容は『リヤマとアルパカ：アンデスの先住民社会と牧畜文化』1995 花伝社、にまとめた）。調査では、多くの先住民の方々と生活を共にさせていただいた。

野外民族博物館リトルワールド

ペルーから帰国したとき、調査成果を博士論文にまとめるため、大学院に戻るつもりだった。ところが、増田義郎先生と大貫良夫先生（現在東京大学名誉教授、リトルワールド館長）から野外民族博物館リトルワールド研究員の就職を勧められた（ほとんど決められていた）。31歳だった。名鉄電車に乗って、当時西枇杷島構内にあったリトルワールド準備室に通うことになった。あるとき、電車の中からぼうっと外を見ると、庄内川の川原に水鳥が見え、「うま

そうな鳥だな」と思った。ふと我に返って、ひとり苦笑いしてしまった。アンデスでは、水鳥などの野生動物を見ると、助手のマリアーノ君が投石縄で石を投げ、たまに当たると、それを料理してくれていたからだ。

リトルワールドは2年後に開館したが、開館前は猛烈な忙しさになった。展示業者との打ち合わせ、展示作業などが続いて、泊り込みもしばしばだった。

開館後も、野外の展示家屋を建設する仕事が続いた、私が担当したのは、北海道アイヌの家屋、ネパールの仏教寺院（チベット仏教寺院）、ペルーのアシエンダ（大農園）領主の館などである。現地調査、建築資材・宗教用具・生活用具の収集・発送・通関などをすべてこなし、日本では建築を指揮し、現地の人を招へいし、そのお世話もした。

アイヌの仕事では、北海道の二風谷に、故・萱野茂さんを訪ね、「アイヌのチセ（家）をリトルワールドに建てていただきたい」とお願いした。萱野さんは「アイヌの伝統技術を次の世代に受け継ぐために、たいへん有難いことだ」と、喜んで引き受けてくださった。「差別と和人に魂を売るアイヌがいやで、アイヌから逃げたけれど、20代の終わりに戻った。逃げたままでいたら、アイヌ（人間）になりそこねるところだった」という、萱野さんの懐の深い人柄にすっかり惚れこんだ。萱野さんは、後に参議院議員になり、国会でアイヌ語で演説をし、北海道旧度人保護法廃止とアイヌ新法の成立に尽力した方である。

ネパールの寺院の仕事では、シェルパ族（チベット系山岳民族）の大工を招いて建築を進め、建物が完成したあとにはシェルパの絵師10名を招き、1年間かけて曼荼羅

壁画を制作した。壁画完成時には活仏を含むラマ僧の方々を招いて落慶法要と仮面舞踊を演じていただいた。

来日した絵師の中にプルバ氏とマヤさんの夫妻がいた。ネパールで何度か流産したが、日本で子どもができ、私が名付け親になった。結局4人のお子さんに恵まれカトマンズに大きな家も建てた。プルバ氏にはその後も現地調査の手伝いをしてもらったが、残念ながらヒマラヤ山中にてヘリコプター事故で亡くなってしまった。

ペルーの仕事では、チャンカイ河谷のアシエンダ「カキ」をモデルとした農場主の邸宅が完成したとき、「私たちはそこに住んでいました」というご一家が現れて驚いた。現地モデルとしたアシエンダは、戦前、日本人第一航海移民の岡田幾松という立志伝中の人物によって経営されていたが、その姪の尾田セツエさんとそのご家族だった。セツエさんはオジの呼び寄せによってアシエンダ「カキ」の支配人と結婚し、幸せな家庭を築いたが、戦争によって北米の収容所に送られ、戦後日本に送還されたのだという。セツエさんとご家族は、私がペルーに行く機会にあわせて、43年ぶりにペルーを訪問することになった。そうしたことがきっかけとなって、日系移民の方々との親交が始まった。

リトルワールドの仕事でも、様々な出会いに恵まれ、多くのことを学んだ。

愛知県立大学の教員に

1986年、愛知県立大学の教員だった大学の先輩にあたる小泉潤二氏（現在大阪大学副学長）異動したため、一般教育の「文化

人類学」の非常勤を頼まれた。授業3コマを担当したが、当時のリトルワールドの仕事の10分の1程度の負担感だった。常勤の教員を募集していることを知り、「大学の教員ってこんなに楽なんだ」と思い、応募した。もともと、当時と比べると、現在は10倍くらいの仕事量に増えている。

自分の人生をふりかえってみると、とりたてて思想もなく、研究者の道を志してからは、よく言えばチャンスを活かして、悪く言えばいきあたりばつりに進んできた。現地から学ぶことを重視してきた結果、海外調査は短期のものを含めれば100回くらいになっているだろう。フィールドワークで多くの人に出会い、多くを学ばせてもらった。いつの間にか、私の場合も、人類学が人生そのものになってしまった。船乗りにあこがれたが、なぜか、高地の専門家のようにってしまった。太平洋の島でカヌーに乗って調査をしていたら、今ごろどんな人生を送っていたらうか。そう思うと、たしかに人生は面白いし、人類学は面白い。

祖父の死 父の死

私の幼い頃の思い出は、野山を駆け回り川で泳ぐという、田舎の楽しい日常に満ちている。が、あるとき平和な農村に事件が起こった。それは私の祖父の殺害事件である。小学校3年生の夏休み。家族はみな出かけていた。私は、いつものように近所のガキたちと群れていたが、その日はいつもとちがう雰囲気を感じた。村の札付きの乱暴者が、家族関係のイザコザで、自分の家の庭に火を焚いて、「火をつけるぞ」と騒いでいた。村人たちは遠巻きにして、それを

見守っていた。私の祖父が、友人のスクーターに相乗りして、警察に知らせに行った。そのうち、なぜか人の輪が私の家の前に集っていた。私もその輪の中において、自分の家の入り口を見ていると、祖父が家から出てきて、ぱったりと倒れた。逆恨みによる犯行だった。

「てっちゃん、おねえちゃんを呼んできな」という誰かの声が聞こえた。それから私は中学校の方に向かって走り、御殿場線の線路を横切った。なぜか、そのときの光景が最も印象強く残っている。思い出すと、自分が見ていた線路ではなく、草茫々の線路を横切って走る「てつや少年」の姿が映画のシーンのように脳裏に映る。中学校に着くと、偶然にも正門の前で友だちと話していた姉に出会った。「おじいちゃんが、」と言ったきり次の言葉が出なかった。

夕方、両親が帰ってきた。知らないおじさんも来て、いろいろ聞かれた。「こどもだから、そのくらいにした方がいいよ」という声がどこからか聞こえた。思えば、刑事の事情聴取だった。葬儀では、祖父の頭にミイラのように包帯が巻かれていた。

翌日から、陽気で闊達だった祖父の姿が食卓から消えたが、実感が湧かなかった。当時の純真な子どもは、憎しみなどという感情は知らなかった。ただ言葉で表すとすれば、了解不能な喪失感というようなものがあつた。

夏休みが終わるころには、祖父のことはほとんど記憶から消えていた。楽しい時間が子どもの心からいまわしい記憶を消してくれる。実際、その後の長い間、祖父の記憶はほとんどなかった。しかし、高校1年生のとき、電気技師だった父が勤め先の工

場で高圧線に感電して亡くなった。知らせを受けて母と姉と病院に駆けつけると、入り口に父が横たわっていた。血色が良くみえ、亡くなっているようには思えなかった。

祖父の死の断片的な記憶は、大人になってからたまたま意識に現れるようになった。けなげな子どもに接したときなどに、「てつや少年」が脳裏に重なることがある。

「死」と「生」をめぐって

ヨットの遭難騒ぎもあつたが、現地調査で、命拾いをした（と思った）ことや、死の恐怖を感じたことが何度かある。ペルーでは、ピストル強盗、極左テロ分子との遭遇など、なんどか危機を回避してきた。

命拾いの最初は、メキシコのサン・フアン村で急性肝炎になったとき。村の祭りに間に合うように戻ろうとして、トラックの荷台に乗ったが、雨になり濡れたままの道中となった。雨季で道が悪く、山中で夜になった。峠の貧しい茶屋で夜を明かしたが寒さで眠れなかった。村に着いてから疲労で動けなくなり、翌日から体が黄色くなってきた。目もまっ黄色で、便はまっ白。村の診療所の若い看護師は休暇で出かけていた。ヘスス先生の奥さんに頼んでお粥をつくってもらい（一回目は親切に砂糖を入れてくれたので食べられなかった）、ビタミン剤を飲んで寝ているしかなかった。若かったので一週間ほどで回復したが、あとで医者に話したら、「危なかったね」と言われた。回復してきた時、夢の中に総天然色の日本食が現れた。

ベッドに臥している間は、「こんなところで死にたくない。どうか生かしてください。

もし元気になれば、世のため人のために働きます」と心の中で念じた。しかし、元気になるって世俗の垢にまみれると、初心を忘れてしまうのが浅はかなところである。

「共生」とは？

「共生」について、どのように考えていくべきだろうか。研究所を立ち上げた手前、「共生」への思いを表明する責任を感じた。そのバックグラウンドを書くつもりで、なんとも冗長なライフ・ストーリーになってしまった。ライフ・ストーリーとは、未来のために過去を再編した物語と言えるだろうか。辻褄あわせの後づけ的編集があり、忸怩たる部分はカットするので、どうしても美化されてしまう。が、今後の自分の方向づけのためには、意味もあるのではないかと思う（書いていしまったので、そう思いたい。それとも、単に年をとったので過去を回想しなくなっただけか？）

「死」を意識すると（意識したくはないが）、人は少しは謙虚になれるという気がする。「死」と「生」の問題の前では、日常のほとんどの個人的問題は瑣末なものとなる。

この世で、限りある「生」を共有している者同士として、無用な争いはやめたいものだ。これが、私の実感（人生観）としての「共生」の基本理念である。

文化多様性

少し学術的な観点、「環境への適応」という観点から、「多文化共生」について考えてみたい。私の共同研究者の川本芳氏（京都大学霊長類研究所、動物遺伝学）から得た

知識だが、種のレベルで他の動物と比較すると、人間の遺伝的変異は格段に小さいそうだ。つまり、他の動物は、地球上の多様な環境に対して、自らを遺伝的に適応させてきた（そのため遺伝子レベルで多様になった）。しかし、人間の場合は、多様な文化を作り出すことによって、多様な自然環境に適応してきたのだと言える。つまり、世界の人類の文化が、グローバル化によって画一化に向かうとしたら、それは人類の存続にとって危険なことである。

つぎに少しだけ視点を変えて、地球上で進んでいる環境破壊と文化の関係を考えてみよう。ユネスコが生物多様性と文化多様性が急速に失われていることに警鐘を鳴らしている。ただ、その両者の関係はあまりはっきりと説明されない。しかし、例えば、私が専門の調査地としているアンデスの伝統文化をみると、環境保全と文化とが密接な関係にあることがわかる。伝統文化には、生物多様性（広く言えば「環境」）を保全しながらうまく利用してきた「共生の知恵」が埋め込まれている。そうした知の遺産を失うことは、生物多様性を失うことにつながる。近代化による環境の悪化は、伝統知を失うことで引き起こされてきた、とも言えるわけである。

グローバル化の中で在来知が再生

私が研究してきたアンデスの先住民社会で、グローバル化の流れの中で「伝統知」が再生した例を見ることができた（本誌の論文に掲載）。「在来知」によって、環境保全が図られ、経済的利益も生じ、先住民の尊厳の回復につながる歴史の見直しも起

こっている。グローバリゼーションにおけるローカリティの再生の例であり、実はこのような現象は世界各地で起こっている。世界が「オウベイカ」一辺倒に向かっているのではないことがわかり、希望がもてる。

以上述べてきたように、人類の存続という視点から見れば、文化の多様性が大切だという前提をまず確認できる。では、実際に、多様な文化、価値観、利害をもつ人間のあるいは集団の間で、紛争や摩擦を回避するため、どのような調整が可能か。それが「多文化共生」の根本的な課題であろう。

現実には、人間の社会では様々なレベルで紛争が絶えることなく起きてきた。大きなレベルでは、資源や経済的利益の奪い合い、宗教やイデオロギーをめぐる対立が、戦争という形で繰り返されてきた。それをなくす手立てを私たちは得ていない。

生きやすい社会を再構築する

身近な地域社会に目を向けると、当面の課題として、「在日外国人」「移住者」との共生の問題がある。しかし、そうした「多文化共生」の問題は、対症療法だけで解決するような問題ではない。それが、外国人が来たから引き起こされた問題ではなく、私たちの社会に内在する問題だからである。長谷川俊雄さんが本誌の研究エッセイで「生きづらさに直面する子どもや若者」のことを論じている。その生きづらさは「社会的な解決が必要な社会問題であると認識することであった。子どもと若者から冒険心や希望や回り道することを収奪することに成功している社会に未来はないだろう」。

そのような観点に全く同感である。長谷

川さんは社会福祉の実践からそのような結論に至っているが、私も以前、文化人類学の立場から、朝日新聞の視点欄に「いじめ問題 アルパカから学ぶもの」と題して、同趣旨のことを書いた(2006. 12. 20)。動物のドメスティケーション(家畜化)を例に出して、次のように述べている。

人類の場合は、進化の過程で、家や都市空間や道具で人為的環境を作り、自らを適応させてきた。それを人類学で「自己家畜化」と呼ぶ。人も、学校など人為的な群れで画一的に管理されれば、ストレスが生じるのは当然だ。急激な情報化など「体外進化」への不適応がそれに拍車をかける。

社会には反抗や逸脱の仕組みも必要で、それが柔軟さや変化を生む。強圧的に管理すれば、ストレスは弱者に向かう。いまの日本は自己家畜化が高じた自縛自縛状態にある。社会の中に「野生」を少しはとりもどす必要があるだろう。

モノゴトを差異化・差別化する動物であり、利己的な(生存のためには利己的であらねばならぬ一面を持つ)人間にとって、「共生」は可能か?これは結論の出ない究極の課題であろう。が、少なくとも、自殺や幼児虐待が多発し、陰湿なイジメの連鎖が常態化したような社会は異常である。経験と知恵を持ち寄ることによって、(とりわけ、子どもたちが)「生きやすい」社会を構想し、それを発信することはできないだろうか。多文化共生研究所における、多分野の研究者、実践者の連携による、その可能性を信じたいところである。

著者プロフィール

稲村哲也 (INAMURA Tetsuya) 国際文化研究科・文学部 (日本文化学科) 教授 文化人類学

■略歴

1950年、静岡県に生まれる。1976年に8年かけて東京大学教養学部を卒業。その間、1973年-1975年にメキシコ留学に続きメキシコ・グアテマラを調査 (放浪?)。1981年東京大学大学院社会学研究科博士課程を単位取得退学。野外民族博物館リトルワールド研究員などを経て、現在、愛知県立大学教授。1995-96年及び1999年に中国北京日本学研究センター (北京外国語大学内大学院修士課程) 派遣教授。その他、野外民族博物館リトルワールド客員研究員、中部人類学談話会 (日本文化人類学会中部地区を兼ねる) 会長なども務める。



ペルー、ピサック遺跡にて 山本紀夫さん (右、国立民族学博物館名誉教授) と

■これまでの研究

大学院博士後期課程在籍中 1978-81年にペルーのアンデス高原 (標高約 4500m) で先住民社会 (ケチュア族)、とくにリヤマ・アルパカ牧畜民の現地調査。以後 100回近く、ペルー、ネパール、モンゴル、中国、チベット、ブータン、エチオピアなどで牧畜社会を中心に現地調査に従事してきた。現在、研究代表者として実施している助成研究として、科学研究費・基盤研究 (B) 「高地環境における家畜と近縁野生種の生態と遺伝学的関係に関する学際的研究—中央アンデスを中心に—」 (平成 17 年度~20 年度)。主な近著は以下。

- ・『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界』 (共編著) 八坂書房 (2000)
- ・『世界遺産 6 ラテンアメリカ—ペルー、グアテマラなど—』 (総合解説) 毎日新聞社 (2001)
- ・『アンデス高地』 (分担執筆) 京都大学学術出版会 (2007)

- ・『『ツァータン』-モンゴル辺境部におけるトナカイ遊牧と市場経済化過程における社会変動-』『エコソフィア』5:101-118(2000)
- ・“The Pastoralism in the Andes and the Himalayas.” In *Global Environmental Research* 6(1):85-102(2002)
- ・「牧畜からみた山の文化-中央アンデスをヒマラヤと比較して」『山の世界』(梅棹忠夫、山本紀夫編)岩波書店:227-236(2004)
- ・「特集・人と自然との共生 現代に蘇ったインカの知恵」『季刊民族学』111:9-15頁(2005)
- ・「アンデスのラクダ科動物とその利用に関する学際的研究-文化人類学と遺伝学の共同-」『国立民族学博物館調査報告』55:119-174(2005)
- ・“Las características del uso de camélidos en los Andes: El pastoreo y la resurrección del “chacu”, la tradición incaica en el Perú.” In *Desde el exterior: El Perú y sus estudios.*, 2005, Millones, L. y T. Kato (eds.)Fondo Editorial de la Facultad de Ciencias Sociales: Universidad Nacional Mayor de San Marcos, pp. 35-70. (2006)
- ・“*Chacu* collective hunting of camelids and pastoralism in the Peruvian Andes” *Global Environmental Research* vol.10, No.1 (Mountain Environments and Human Activities), pp.39-48 (2006)
- ・「特集:21世紀の牧畜民 常識をくつがえす中央アンデスの牧畜と狩猟」『月刊地理』52-3(通巻620号):32-40(2007年)

■ これからの研究

現在3つの共同研究に従事。(1) 科研費による「高地環境における家畜と近縁野生種の生態と遺伝学的関係に関する学際的研究-中央アンデスを中心に-」では、牧畜文化や動物の家畜化(domestication)などをテーマとしており、これはライフワーク。(2) 共同研究者として、科研費による「ペルー海岸地方における先土器時代神殿の建築構造と自然災害に関する学際的研究」の研究に従事し、考古学発掘と連携して、学際的研究を行っている。(3) 総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「3大『高地文明』における生態・文化的適応」のメンバーとして、アンデスとヒマラヤ・チベットに加えて、エチオピア研究を昨年開始。また、NPO活動として、ペルーで、地震の被害軽減のための技術移転、古代遺跡の保全、学校建設などを仲間と一緒にやっている。日本ペルー協会理事、ネパール東海友好の会理事などを務め、ペルー、ネパール、モンゴルなどとの国際交流・支援活動も行っている。こうした活動もさらに推進していきたい。

■ 「共生」について

多文化共生研究所で、みなさんと共同で総合的な共生研究を実践し、愛知県立大学の存在意義を示したい。「いじめ」「児童虐待」などは日本社会の重大な社会病理であるが、文化人類学的な視点から、社会における子どもたちの学習・教育に貢献できないかと考えている。モリコロパーク(愛・地球博記念公園)の運営を行う公園マネジメント会(準備会)の会長を務めているので、そことも連携して、環境との共生、国際理解・多文化共生、文化の世代間継承などの拠点として、社会の野外学習の場とし、その試みを広く発信したいと考えている。